

の
会
美
紗

た よ り

生きるを楽しむ・音を楽しむ

西松 布咏



福原 毅

今年も間もなく終わろうとしている。

前回の「たより」で、これから迎える半年の日々も感謝して精進して行きたいと述べたが、その気持ちで過ごすことが出来た一年となつた。

長年来、心の中で暖めていた名取りによる演奏会「己紗の聲」が台風で交通網が混乱する九月三十日に銀座ライオン音楽ビヤプラザで発足した。従来の名取り制度ではなく美紗の会らしく各々の持ち味が出るようにと苗字（己紗）を名乗る名取りが二十二名誕生したが、精進の日々の中で、私が元気なうちにその成果を発表する会を船出させたいとの想いが弟子を始め皆様の協力により実現したことは大きな喜びであった。結びの挨拶で「美紗の会は生きるを樂

しむ。音を楽しむ為に生まれました。」と述べたが三昧線音樂が毎日の生活のなかで、息づいてくれることを切に思う一年でもあつた。

十月二十七日に「ゆく秋に映して唄ふ忍ぶ想い」と題し人形町よし梅で四度目の演奏をさせていただいた。玄関を開けると懐かしく人を包み込むよう時に経た香りが漂い「ここで三昧の音を響かせたい！」と二年前の秋の感激がいつも蘇る。古き良き日本のたたずまいが好き、樋口一葉が好きという女将との出逢いからご縁が始まったので今回も「布咏さん的好きなように構成して下さい」との有り難い言葉に、自分の好きな「秋によせる様々な恋唄」をお客様に語りかけるように唄えた至福のひととき。

その終わりは、半井桃水が密かに一葉を思つて作つたであろう哥沢「お月さん」に女将の多身予さんへの感謝の気持ちを込めた。

十二月一日は今ではホームグラウンドである「赤坂クラブ」で一門による「第五十六回美紗の会のつどい」演奏会を開いた。この会場は赤坂界隈にあり、かつては歌舞伎役者の市村羽左衛門丈の由緒ある住いであつた。弟子のご主人の紹介で何回となく開催していたが七年前の震災で解体となり途方にくれていたところ、「以前の面影はありませんが狭くても宜しければ…」とクラブの女将から連絡をいただき蘇つたビルの座敷で又開催させていただいている。

いつもより参加人数が少なかつたが稻垣文子さんの優しく暖かい司会で肃々と進み、時代劇が好きという入門から半年の若き弥富君の「初めより」で幕開けしトリは三十五年余にわたり稽古を続けている大御所己紗忠咏さんの寂の利いた「年の瀬や」そして恒例の花柳千寿文師による舞踊「香に迷ふ」で今年の会を終始和やかな雰囲気で終えることが出来た。六歳で三昧線音樂と出逢つたが不器用ゆえ不甲斐な

い自分と向き合いながら周囲の方々のお蔭でようやく「生きるを楽しむ・音を楽しむ」の心境になつた今日この頃、南禅寺管主・柴山全慶の「花語らず」の言葉に出会つた。

花は黙つて咲き 黙つて散つてゆく

そうして再び枝には戻らない
けれどもそのとき一時一処に

この世のすべてを託している
けれどもそのとき一時一処に

一輪の花の声であり一枝の花の生である
永遠に滅びぬ生命の喜びが悔いなくそこに輝いて

いる。
これからも精進してゆきたいと切に思う。

これまでに開催された会の集合写真



三味線を学んでみて

弥富 久和



前川 充

元々時代劇ものが好きで、小説、ドラマ、漫画とよく楽しんでおり、幼少期には水戸黄門を欠かさず観るような性格でした。おそらく、江戸大衆文化の雰囲気が自然と好きだったのだと思います。ただ、興味はあったのですが、自ら本格的に参加するような機会には恵まれず、今日に至つておりました。

そんな中、たまたま旧仕事仲間の宴会の席で、俊咏兄とお会いする機会があり、三味線を習っているというではありませんか。丁度、柴田鍊三郎の御家人斬九郎ドラマを観た後だったので、これは面白そうだと、すぐにお稽古を見学させていただくことになった次第です。ちなみに、御家人斬九郎には、辰巳芸者が三味線を弾くシーンや、主人公の母上が鼓の名人で、鼓を奏てる場面が度々登場するなど、音楽要素も注目の作品です（なんとオープニングとエンディングにはジャズが採用されており、これがまた江戸の雰囲気と合うのです）。

そして、見学の場で初めて、じっくりと本物の三味線の音を聞かせていただいたのですが、その音色

の心地良さに心が踊ったのを、今あらためて思い出しております。当然、すぐに入門させていただきました。とはいっても、始めは自宅でお酒でも飲んでいる時に、ペンペンと何か気分良く真似事でも出来れば良い、程度に軽い気持ちでいたのですが、

実際にお稽古に入つてみると、やはり大変難しい。また、特に歌の独特な歌いまわしが難しいというか、なかなか慣れない。余談ですが、実は入る時、歌を合わせて教わるということを聞いていなかつたので、初日の練習で歌うと分かった際、心の準備ができるはず何が何やらという感じだつたため、歌はいい

やと、適当にやつておこうと思つたりもしたのですが。今では、稽古で唄つているうちに気分が良くなれる自分に気づき、逆にちよつとはまつております。稽古では、色々な発見があるのも収穫です。特に、お師匠との会話では密かに様々なことを学んでおりまして、特に、お師匠の「三味線は辛抱です」という粋な言葉が印象に残つていて、三味線稽古の奥の深さと心意気を勝手に感じ取つたりもしました。その時は稽古にも仕事にも、もっともっと精進しようと深く思つたものです。

そうして多少の辛抱の甲斐あつて（？）十二月一日の「美紗の会のつどい」では、唄の出番をいただくこととなり、出来はお恥ずかしい限りですが、なんとか唄いきることが出来ました。これもひとえにお師匠が下手な私に辛抱して手ほどきしていただきた賜物だと感謝している次第です。

最後に、余談ですが、会の当日にハプニングがありました。なんと本番で唄つている最中に、気合と気が入り過ぎたのか着物のお尻のところが破けてしまつたのです。唄つている時に実は、ぴりつと糸が切れる音がしたので気がついてはいたものの、目立

たないだろうと、席へ戻つてしれつと座つていたのですが、そしたら流石は着物屋さんの河内さんが、僕の肩をポンポンと叩いて、「お尻が破れているよ。控えで縫つてもらひな」とおっしゃつてくださったのです。早速、お尻を隠しながら、控え室へ行くと、すでに伝わっていたのか、皆様総出であれやこれやと手はずを整え、針と糸を借りて、その場で手際よく縫つて頂いたのでした。

幸い次の出番には間に合い、少し動搖しながらも無事唄い上げることが出来ました。この場を借りて、皆様に助けていただいて唄えたことに感謝とお礼を申し上げます。

技術はともかく、意識は変わった 「己紗の聲」

己紗 咲治

猛烈な台風が関東地方に迫りつつあつた九月三十一日（日）、銀座ライオン五階の「音楽ビヤプラザ ライオン」にて第一回「己紗の聲」が開催された。普段の稽古の成果を発表するお済い会としての「美紗の会のつどい」とは別に、西松布咏門下の名取連中がチケットを販売して主催するれつきとした演奏会である。だから「開催された」というどことなく他人事な、受動的な表現ではなく、自分たちでもろもろ準備を重ねて、能動的に「開催した」と言つたほうが正しい。しかも、いま書いたように弟子連中の芸をお客様にお金を払つて見に来ていただくというのはこれまでになかつたことである。「美紗の会のつどい」が決して手を抜いているわけではないけれども、金はいただいていいわけだから、最悪、ミスをしたとしても「お耳汚し失礼しました」で済むといえば済む（いや、済まないかもしない）。が、チケッ

トを購入して来場してくださった方々に下手なものをお聴かせするわけにはいかない。だいいち、師匠の体面にかかる問題である。

「美紗の会」の住咏会長からの召集を受けて最初の打ち合わせをしたのは四月の末か五月の初めだった



ろうか？ なにぶんこれまでやったことがないことであり、何から手をつければいいのかもわからず、まずはそもそも論として会のコンセプトから話し合つたのを覚えている。それから各自演奏する演目を決めたり、会場の下見に出掛けたり、チケットの値段を決めたり、当日のプログラムを作成したりと、会長を中心にバタバタの日々であった。「美紗の会のつどい」のときにはあまり意識していない所作についても、壽咏さんこと花柳千寿文先生に細かくご教授をいただいた。筆者も微力ながらプログラムのテキストや司会の川崎さんにお渡しする演目の紹介文を書かせていただいたが、これもなかなか大変で、会長からの催促を受けてようやく書き上げたような次第である。

普段「芸事をやっている」などと軽い調子で言っているけれども、こうして実際にお金を取つて自分の芸を披露するというのは大変なことである。下手なりにもお客様には何かを感じ取つて帰つていただかなければいけないわけで、会場の設営や運営もされることながら、やはり、演奏に対する緊張感はこれまでに体験したことのないレベルであつた。「まあ、こんなもんか」では許されない。当然、師匠の稽古もいつも以上に熱がこもつており、「いつもとは違う何か」を求められていたような気がする。

「いつもとは違う何か」…。もちろん、稽古も必死にやり少しでも失敗のないように練習を繰り返したわけだが、そうそう急速に腕が上がるわけでもないことも事実である。と考えると、師匠がわれわれに求めていた「いつもとは違う何か」とは、技量の問題というよりは意識の問題だったのではないか？ 劇的に芸の質が上がることはないことを嫌と いうほどわかっているわれわれとしても、「己紗の聲」に臨むにあたつて変えられるのはむしろ意識のほうしかな

かつたと言つていい。結果、各々「いつもとは違う何か」が多少なりとも表現できたのではないか？ 最初は年二回の「美紗の会のつどい」がもう一回増えるくらいにしか考えていなかつたけれども、終わつてみれば、「美紗の会のつどい」では掴めなかつた何かを掴めたような気が少しだけしている。それはおそらく自分だけではなく、他の名取の方々も同様だつたようにも思う。それぞれ技量の大幅な向上があつたかどうかわからないにしても、意識の上では何らかのバージョンアップがあつたに違いない。舞台の袖ですべての演目を聴いていたのだが、各人の演奏に「いつもとは違う何か」を感じ取ることができた。

最後に、当日のお手伝いをしてくださったお弟子の皆様、三味線の持ち方からお辞儀の仕方までご指導くださった花柳千寿文先生、そして「己紗の聲」のために特別に稽古をつけていただいた西松布咏師匠にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

ゆく秋に映して唄ふ怨ぶ想ひを

酒井 忠弘

布咏様

先日は、人形町の「よし梅 芳町亭」という登録有形文化財の座敷で、久し振りに布咏さんの唄をお聴きして感激を新たにしました。その余韻を追つて、昔に買い求めた「夢」というタイトルのCDを聴いています。

CDに付いている小冊子には、見開きに、「傳き愛を唄う」2003・3・9西松布咏」と布咏さん直筆の署名があり、田中優子さんの「つかのまの物語」という解説風の素晴らしいエッセーも載っています。

もう十五年前のこと。その頃は、布咏さんの演奏会には田中優子さんもいつも来ておられて演奏後の打ち上げにも参加しておられましたね。新潟の鍋茶屋での文弥人形とのコラボでは、田中さんも追っかけのようになっておられて、お互いに「こんなところまで！」とビックリしたものです。

懐かしいです。人の世のことは並べて傷く移ろつていき、留めるすべもなく、あの頃と同じような心の感動、共感をと思つても如何ともし難く、布咏さんの三味線と唄の声色にその「時の哀しみ」をしみじみと感じます。大袈裟に言えれば、マルセル・ブルーストの「失われた時を求めて」をすら想起します。そんなことを思いながら、布咏さんにお便りをしたためています。

お骨折り下さったお蔭で、「芳町亭」に親友の石部君を誘うことが出来ました。彼にとつて初めての江戸唄を、布咏さんの演奏で、それにふさわしいお座敷で聴く機会を得て貰えて本当に良かったです。彼も感動し、とても喜んでいました。有り難うございました。彼には、以前にラジオ深夜便の録音テープのコピーを差し上げ、彼は布咏さんの話しに感動して、唄を聴きたいとの思いが募っていましたので、これで石部君も江戸唄の、それも布咏さんのファンになり、共感を持つて語り合える友になつたことが、私にはとても嬉しく、いつか誰かに上げようと一枚購入しておいた「夢」CDの一枚を彼に送りました。「夢」CDには過日の演奏曲のうち蘭蝶、仇名草、さび鮎、海裏寺、お月さん、の五曲が収録されていて、余韻に残る過日の布咏さんの唄がそのときからどう変わったかと、十五年の進化を探るように較べながら聴いています。過日は時間の長い地唄などは聴けませんでしたが、これは別のCD「Sii-k SOU」で黒髪などを聴きながら、布咏さんにお目に

かかる次の機会を期しています。
秋も深まり四日後は立冬です。朝夕の冷え込みは時に冬のように厳しくなります。
ご自愛いただき、どうぞお元気でお過ごし下さい。

ご活躍をお祈り致しております。

福原 毅



芳町亭で決めたこと

川崎 隆章

十二月一日の「美紗のつどい」でもご挨拶いたしましたが、この秋から十五年ぶりにお稽古に復帰いたしました。もっとも、その間も「つどい」のたびに司会役で皆様とお目にかかるつどいから、あまり久しぶりという感はないのですが、久々に舞台に上がればそこはやはり久々の眺めで、緊張もすれば、照れもします。ああ、この感じだよなあと十五年のブランクを顧みる暇もなく再出発の三曲を終えることが出来ました。

復帰のきっかけは、一〇一八年五月に広尾「祥雲寺」で行われた、布咏師匠とさがゆきさんとのデュオ「いと、いとし」のライブでした。なかなかチケットが手元を離れず苦戦していた時、私と入門がほぼ同期の悠咏さんに「一枚買ってくれませんか」と声をかけると、絶妙の間合いで「あなたが復帰するなら買わねヨ！」とのお返事。「わかりました！必ず復帰します」と勢いで返事をしました。これが決断の瞬間です。

いや、以前から悠咏さんには会うたびに「いつ復帰するの？」と言っていたので、いつかは復帰しようと思っていたのですが、絶妙のタイミングで背中を押して頂きました。悠咏さんはライブ当日、仙台への出張に出かけるのをギリギリまで引っ張つて、聴きに来てくれました。本当に有り難く思っています。

さて、稽古場から遠ざかっていた三十九歳から五十四歳までにどんな変化があつたか。普段あまり物事を振り返らない私ですが、思わず振り返ってしまいました。もちろん、多少の人生経験と、多大な音

樂的な寄り道のおかげで、昔聞こえていなかつた音や作者の声が聞こえるようになったと思います。ことに、離れる悲しさと、叶わぬ事への尽きぬ想いは、どんな世界でも大事なテーマで、より身近なものとなりました。

もう一つは、音楽の受け止め方です。思えば昔は、なんだか芸術性を意識して高尚な気分を三味線音楽に求めていましたが、今は、もっと自分と隣り合わせの「私の大事な世界」になりました。何かをしながら鼻歌に出てくるのも楽しいですし、鼻歌と言いながら、うまく回らない小節を何度も試したりして、生活の一部になりました。

生活の音楽といえば、十月二十八日、人形町よし梅芳町亭で行われた演奏会「ゆく秋に映して唄う忍ぶ想ひを」を思い出します。この会は、普段から食と日本の芸能を組み合わせたイベントを企画している料亭・よし梅さんの主催でおこなわれたもの。布咏師匠と、ツレ弾の佳咏さんのご出演でした。戦火を逃れた人形町界隈の一角に、ひときわ古風な佇まいをあらわす文化財「芳町亭」のお座敷で、昼と夜の二回にわたり江戸唄が演奏され、つづいて季節のお食事を楽しむという企画でした。



福原 毅



福原 毅

日本文化の要衝ですが、この日は、唄も、料理も、建物も、しつらいも全てそこで嗜み合いました。大きな中から「真髓」を抜き取つて、小さく懐に収める。それが江戸や上方、そして日本文化の本質にあるのだという事に、改めて気付いてしまうと、目の前にあるムカゴや焼魚、あるいは舞台の一枚の譜面も疎かには扱えなくなります。

荒れ果てた時代、小さな営み、小さな命、小さな文化が滅ぼされてゆく時代…皆、危機感を抱いてはいるものの、為す術はなく、もはや助けようと世話を焼くのも大変です。しかし、歴史を遡ればこの日本も中世以降何度も荒れ果てては再興を果たしてきましたが、その時人々を衣食住とともに支えたのは、身分に関係なく無一文でも心を満たすことができる「唄」でした。それを思えば、今、せめて、自分の心の中の唄だけでも大事に守つてやろう、そして、できるだけ頑張つて、たくさんの方を守つてやろう、と、決意したのでした。かくして芳町の夜は、心を決めた夜となりました。

おかえりなさい！川崎さん

「己紗 悠咏

美紗の会同期生の川崎さんが十三年のブランクを乗り越えてこの度復帰されたことが嬉しくて思わず筆をとつてしまつた。

十七年前、平成十三年の初頭、入門間もないころ、稽古場に向かう師匠のお宅の階段で稽古が終わり大汗をかいて降りて来るとすれ違つた（すれ違いにくかつた）のが川崎さんとの出会いである。同時期の入門ということもあり、その後おさらい会では、「忍

輪挿しのような夢いものに置きかえる。これこそが

私は夜の部を聴きましたが、比較的、易しく、わかりやすい曲が中心の選曲と構成。まさに芳町亭が生まれた頃の、すなわち三味線が生活の身近に鳴り響いていたころの雰囲気を彷彿とさせました。大仰に江戸や日本を論じるではなく、静かに、ひそやかに楽しむ、暮らしどり隣り合わせの愉悦しみ…

お料理も、料亭ならではの手間のかかった季節の献立でしたが、そこは商人の町日本橋の店らしく、華美を避け味の深みと季節の香りを楽しむ情緒の世界。露地の鉢植えから突き出た小枝や小さな花で山大きな芝居や楽曲から深みや香りを抜き出して一

だいた。川崎さんは、独特の間の良さで器用に軽妙に（人知れず練習されていたとは思うが）唄い、美紗の会では「岡崎（一詠）さん」「伊勢（克啄）さん」の流れをくむ「あれわいさ系」のホープであった（と思う）。また、「落語のプロデューサー」というお仕事柄話術も巧み、軽妙洒脱で人をそらさないお人柄もありおさらい会の司会にも定評があつた。

しかし五、六年経ち美紗の会になくてはならない存在になられたころお仕事のご都合でお稽古は一時休止状態となつた。とても残念ではあつたが、美紗の会のおさらい会、師匠の演奏会などでは度々お目にかかる機会はあつた。何回かお稽古の再開を勧めたことはあつたが、手びたえはなかつた。

しかしながらでも諦めずに続けていると瓢箪から駒と言うか思ひぬところで願いが実現するものである。五月に広尾の祥雲寺で行われた師匠とさがゆきさんのコラボセッションの時のことである。会を成功させようと一生懸命チケットを販売する川崎さんに「川崎さんが稽古を再開するなら買います！」と言つた。すると図らんや「じゃ、稽古再会約束する」と。かくして「男と男の約束？」となつた。

今年の夏ごろ師匠が「川崎さん唄だけだけど稽古始めたのよ」と聞いたときは約束を守つた男気を感じ何とも嬉しかつた。

「己紗の聲」が終わり十二月一日の「美紗の会のつどい」に向けて、私はちょっと姉さん風を吹かせ「川崎さんの伴奏をします」などと言つてしまつた。師匠が選んだ曲は「昔隅田」と「味」。

「昔隅田」は、歌と三味線の掛け合いが難しい。何度やつてもうまく合わない。師匠は「予想通りとおつしやつた。三味線は唄に合わせなければならないことを痛感した。「合わせてあげましょ」などと思っていたのは私の驕り。本番では私が間違え

て川崎さんに慰められる始末。ああヒヤヒヤだ。

演奏の後の宴会で、司会をしている川崎さんに指名され、再開の顛末を話したら絶妙のタイミングで司会者に「仕事柄（私は産婦人科医）人を引っ張り出すのが上手！」と言われ、「しまつた一本とられた。」その場で言い返せなかつたのが悔しいが、川崎さん、「赤兎は引っ張り出すのではなくて、母（師匠）の力で自ら生まれてくるのですぞ！」

何はともあれよかつた、よかつた。これからも仲良くお稽古していくましよう。



前川 充

《今後の予定》

- ◎三月三十日（土）午後十一時半より 開演
赤坂クラブ
- ◎九月七日（土）午後三時より 暫定
美紗の会一門の演奏と親睦会
軽井沢 鶴間邸
- 第五十七回美紗の会のつどい
第9回劍の会

■たより 第88号

- | | |
|---|--------|
| ■ 美紗の会 | ■ 美紗の会 |
| 主 宰 | 美紗の会 |
| 稽古場 | 美紗の会 |
| 電 話 | 美紗の会 |
| 西松 布咏 | 美紗の会 |
| 港区白金台三一一二
白金台アレイス三階 | 美紗の会 |
| (三四四一)一一七一六
(五四四七)一一四一二 | 美紗の会 |
| E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp | 美紗の会 |
| URL:http://www.misanokai.com/ | 美紗の会 |

